

湯浅誠著『ヒーローを待っていても世界は変わらない』朝日新聞出版社（2012年）

世界はどうしたら変えられるのか、世の中はどうしたら良くなるのか。著者はこの問いに対して、民主主義を通じて、ゆっくり変えていくしかないと答えている。著者はその理由を以下のように説明する。

日本では、社会の仕組みを考え、決定するために議会制民主主義を採用している。私達の選んだ代表が物事の決定を行うわけだが、決定の前には、常に調整という高い壁が立ち上がる。そもそも、なぜ調整が必要なのかというと、簡単に言ってしまうと民主主義は、みんなで話し合っただけというシステムだから、それぞれ異なった立場に置かれている私達の意見をすり合わせ、妥協点を見いだす作業をしなければならないからである。

しかし、話し合っただけというのは、そう簡単ではない。たいいてい人は似たような意見や考え方を持つ人たちと接している場合が多い。同質性の高い集団のなかでは意思の疎通は簡単で、相手の言うことを理解できる。だが、この集団から一歩外へ踏み出し、自分とは違う集団に属している人と話をすると、相手が一体何を言っているのか、どうしてその考え方に至るのかわからない、つまりコミュニケーションがとれないのだ。自分の意見をぶつけてみよう、良い社会をつくるのだと、意気揚々と議論に臨むが、話し合いはコミュニケーションの洗礼を受け、まず相手が何を言っているのかを理解する作業からはじめざるを得ない、議論はなかなか進まないのだ。

著者は、政治が遅々として進まない理由を、民主主義を通じた決定のありかたに求め、これが人々に決められない政治と映り、政治への信頼を失わせている要因だと考えている。決められない政治に失望した人々は、決めてくれる（たとえ独断であったとしても）ヒーローの登場を期待する。ヒーローはたちまち悪人を見つけ出し、既得権益だと批判して、のんびり議論している暇などないとばかりに、悪人をばっさばっさと切り倒す。政治はヒーローの登場ですぐさま動きだし、みんなが望む社会が実現される。著者は、政治におけるヒーロー待望論をこのように説明したうえで、ヒーローの登場で世の中が劇的によくなることなどあり得ない、期待は幻想にすぎないと、いわゆる「橋本現象」に警鐘を鳴らす。

一見すると、ヒーローは世の中の悪を成敗してくれる、既得権益を排除してくれる存在にみえる。しかしこれは大きな間違いで、善悪というのはそんなにはっきりしていない。著者は、障がいを持つ自身の兄も、考え方によっては雇用を保障され障害年金を受け取る既得権益とされてしまう、と危機感を抱く。著者の言葉を借りれば、「自分にとっては『必死の生活とニーズ』であるものも、他の人からは『しよせんは既得権益』と評価される」（p. 33）のだ。ヒーローは議論するまもなく既得権益と決めつけた悪を排除するので、気づいた時には自分が既得権益とされていた、斬りつけられて深傷を負っていた、となってしまうというのだ。

気づいた時は遅かった、とならないためにはどうしたらよいか。それは、本書の中心的なメッセージである、議論を尽くして話し合いで課題を解決していくこと、つまり多様性と議論を重んじる民主主義を貫くことだ。それぞれに立場も違えば事情も違うが、妥協点はあるはずだ。議論も尽くさず、ヒーローが一人で勝手に決めてしまうなど、民主主義にはあってはならない。日々の生活に追われるなかで、世の中のことを考える時間などないかもしれない。しかし、主権者である以上、どのような社会にしたいのか、そのためにはどの政策をとるのが最善なのかを考えなければならない。政治というのはフラストレーションのたまるもので、理想の社会とは何かについて精根尽き果てるまで考え、政策を吟味して一票を投じた政党が政権を取ったとしても、社会はほんのわずかしかならないのかもしれない。しかし、少しずつというのが実は大切で、物事がなかなか進まないというのは、たくさん熟議があったことを物語っている、と著者は本書を通じて訴えている。

政治はどのような方向に進むのだろうか。私達の選んだ代表は、望んだ社会を実現してくれるだろうか。いや、本来は私達自身が社会を担っているのだから、望む社会はみんなで議論をして作り上げなければならないはずだ。時には、声を上げることで政治に参加し、議論を促すことが、主権者たる私達の責任なのではないだろうか。（仲塚 周子）